雪華の声

野見山悠紀彦

本所で生まれた慶次郎は、志を抱いて大坂の緒方洪庵のもとへ向かう。三年後、江戸に戻った慶次郎は、医療に勤しむ傍ら父親の出自と死の秘密を知る。穢多頭の弾左衛門や非人との関わりを通じて、声なき者たちの声を聞こうとする。

本所御竹蔵（おたけぐら）の東、南割下水（みなみわりげすい）に接して御家人が密集して暮らしている。その一角に、山田惣兵衛と木村嘉平の屋敷が軒を連ねていた。たまたま性分が合っていたのか、惣兵衛と嘉平はまことに仲が良い。惣兵衛は嘉平より五歳年上であるのだが、二人の間に堅苦しさを感じさせるものは何もなかった。常に二人は背を丸め、小さな声で穏やかな会話を楽しんでいた。同朋との付き合いは形ばかりにして、二人は兄弟とは云わぬまでも、ごく親しい親類のような付き合いをしていたのである。

惣兵衛には二人の男子があり、長男は二十歳になる。名を惣一郎と云い、十五歳になる次男は慶次郎と名乗った。但し生母であったとよは、慶次郎が生まれると間もなくこの世を去っていた。今この男所帯を取り仕切るのは、五十歳を超した下女のおときであった。惣兵衛が山田家に婿養子に入ったとき、おときは既に下女として働いていた。嫁にも行かず、二人の男子の母親代わりを務めていた。

一方、嘉平にも男子と女子の二人があり、十五歳の長男は伊織と名乗り、十歳の長女は澄江と云った。二人の生母のお信（のぶ）は、他人の目にも大きな身体つきをした、おおらかな女であった。当主の嘉平は痩せて小さく、蚤の夫婦と囁

く者もいた。
長男の伊織と隣家の慶次郎は同じ年の生まれで、お信は母親を失った慶次郎を哀れに思い、幼い頃より二人を兄弟のように扱った。実際にその豊かな乳房を慶次郎に与えたことは、一度や二度ではなかった。
そんな両家であったから、他家との付き合いは形ばかりで、まるで一家族のような日々を送っていた。両家を隔する塀などは、まるで在って無き存在であり、始終塀越しに声が飛んできたのである。
兄弟のように育った両家の子供たちは、何かと云えば行動を共にし、やれ神田祭だ、それ天王祭だ、両国の花火だと、年長の惣一郎を先頭にお信やおときも加わって賑やかに繰り出していた。幼い頃の澄江は、兄の伊織や惣一郎の背に負われて、買ってもらった玩具や飴を肩の上で振り回していた。そんな澄江の背後から、慶次郎は澄江の髪を摑んだり、手にしていた玩具を奪い取って澄江を泣かせていた。しかしそれも澄江が十歳近くになり、一人歩きが確かなものになるにつれて気恥ずかしさを覚え、いつしか距離を置くようになっていた。
あるとき惣兵衛・嘉平はいつものように機嫌よく飲んでいた。その酒席での戯言（ざれごと）で澄江のことが話題に上って以来、慶次郎はなおさら声を掛けられなくなっていた。
両家の家族が出払った後の留守を守るのは、いつも惣兵衛と嘉平であり、これ幸いと二人で酒を酌み交わしながら一行の帰りを待っていた。ただ話をするのは嘉平ばかりで、それも釣りの自慢話と決まっていた。惣兵衛は、
「さようか、さようか、それは工夫をなされたのう」
と、ただ相槌を入れるばかりで、自ら話を持ち出すことはない。人付き合いの少ない惣兵衛と云えば滅多に出歩くこともなく、早朝に散歩に出ても割下水を一周して帰ってくる。出歩くときは習い性になっているのか、必ず古びた塗笠を着用していた。雨や炎天下の外出は勿論のこと、どんな晴天の日であろうと忘れずに笠を被っていた。その俯き加減の姿勢は、見ようによればことさら顔を隠しているようにも思えた。
御家人と呼ばれる両家は直参の身分とは云え、ともに五十石に満たない無役の小普請組であった。かろうじて武士の面目を保つ存在であり、したがってご多分に漏れず、両家ともに内職に精を出していた。だがその内職は、他家とはずいぶん違ったものであった。
木村嘉平の片手業（わざ）は趣味の魚釣りが高じて、今や漁師そのものと云ってよかった。漁師の三蔵と組んで大川に舟を

出し、獲った魚は三蔵の得意先に売って金子を得ていた。これほどのめり込むにはそれなりの経緯があり、嘉平にとっては自然な成り行きであった。五年前の早春に大嵐が江戸を襲った。親から引き継いだ三蔵の舟は流され、無残な姿となって佃島の岸に沈んでいた。

嘉平はいつも利用している舟を失い、大いに困惑した。だが時を置かず、三蔵を励まして一つの提案をした。

「なあ三蔵、わしが舟を買おう。お前に貸し与えるから、これまで通り釣りに連れて行ってくれぬか？　舟はお前が自由に使って構わぬ。わしは好きな釣りがしたいだけじゃ」

「しかし……旦那、それじゃあんまりだ。旦那、こうさせてくだせえ」

三蔵は売った魚の代金の、その半分を渡すと申し出たのだ。いや無用だ、それじゃこちとらの気持ちが治まらない、と散々押し問答のすえ、売り上げの二割と獲った魚の中から好きなものを持ち帰ることで決着した。

後の話に、妻女のお信は大きな身体をゆするように笑い、

「我が家の貯えを全て吐き出しました」

と云って、あっけらかんとしていた。但しそのことで、木村家にかぎらず山田の家にも多大な福音が齎された。とにかく総菜の心配をする必要がなくなった。二日と空けず、絶えず鮮魚が齎されることで費(つい)えが減り、両家の膳の上は格段に賑やかになった。

塀の向こうから嘉平の声が掛かる。

「惣兵衛殿！　今宵は鰻じゃ！　参られよ！」

「おお、心得た！　下り酒がござるぞ！」

魚の馳走に対して、一升徳利を提げて訪れるのが恒例となっていた。

嘉平の内職もよほど変わっていたのだが、惣兵衛の片手業も相当特殊なものであった。それはとても、片手間で行えるようなものではなかった。その出来栄えも、素人の域を遙かに超えていた。惣兵衛は鑿(のみ)や彫刻刀を巧みに使い、五寸から一尺ほどの諸仏を彫り上げては、田原町の仏具屋に納めていた。こうなった経緯は、店の主人との偶然の出会いにあった。

惣兵衛は彫り溜めた仏像を抱え、仏具屋を訪ねては、引き取ってもらえぬかと風呂敷を解いた。品物を目にした番頭は即座に買わせて頂きますと申し出たが、いざ買値の相談になると、一体に二朱から一分の以上の値は付けず、それ以上は譲ろうとしなかった。数軒の仏具屋を回ってみても、いずれの店も大きな違いはなかった。

初めての経験に、そんなものかと淋しい思いを抱きなが

ら浅草の広小路を歩いていると、右手の奥に大きな仏具屋が目に入った。二、三歩行きかけた足を止め、これを最後とその仏具屋に向かって歩き出した。

品物を手にした番頭は、

「ほほう、見事な仏さまでございますな。あなた様がご自身で？」

どの店でもそうであったように、見下げるような態度を示した。

「さよう。引き取ってもらえるなら如何ほどになろうか？」

半ば諦めと投げやりな気持ちで云った。

「さようでございますな。どれも同じ値とは行きませぬが、この一尺の観音像は一分で引き取らせて頂きます。五寸ほどの仏は二朱で如何でございましょう？」

予想していた通りの答えが返ってきた。さようか、また出直す、と仏像に手を伸ばしかけたとき、背後から声を掛けた者がいた。

「少しお待ちくだされ。今一つ拝見させて頂けませぬか？」

出先から戻ったところであろう。店の者が一斉に挨拶を送った。店の主人と思われる五十絡みの男は、常陸屋庄兵衛と名乗った。

五体の仏を一つ一つ手に取って、入念に見入っていた。そして大きく頷くと、

「番頭さん、一尺の仏さまは一両、五寸ほどの仏さまは二分でお願いしなさい」

思わず見上げた惣兵衛に対し、

「如何でございましょう？　ご承知頂けませぬか？」

口元を緩めて柔らかく微笑んだ。惣兵衛に異存はなかった。

それ以後は常陸屋が一手に買い上げることで話がまとまり、客の注文を受けて彫ることも多くなった。

もともと出歩くことがなかった惣兵衛は、居職の職人よろしく日がな一日鑿を手にしていた。常陸屋庄兵衛は、名が売れれば名人の作として数倍に売れると云ったのだが、惣兵衛は名を出すことも名が売れることも嫌った。無名の作でよいと云い、決して住まいや身分を明かさせぬように念を押した。

「どちらで修行をなさいました？」

との常陸屋の問いに、飛騨の匠に手ほどきを受けたと云ったきり、詳しい事情は語ろうとしなかった。

それ以来、月に一、二体の割合で制作し、年に二十両近い収入を得ていた。彫刻の技はますます磨きがかかり、問屋仲間では密かに噂になっていた。常陸屋の値上げの提案

にも耳を貸さず、御仏に値を付けることさえ憚られると云った。

惣兵衛の彫る仏の材は、江戸ではなかなか手に入らない。飛騨の匠の流れを受けて、使用する材は一位の木（アララギ）のみであった。この難題も常陸屋が引き受けてくれ、惣兵衛の求めに応じて材は滞りなく提供されていた。惣兵衛は四畳半の一間に籠り、ひたすら鑿を手にしていたのである。

波風の立たぬ穏やかな暮らしが十四、五年も続いている。だが良きにつけ悪しきにつけ、変化の波は必ず押し寄せる。子供たちの成長に従って、この両家にもその転機が訪れようとしていた。

山田家の長男、惣一郎の婚姻がまとまり、来春には新妻を迎えることになった。元服前から通っている開明塾の塾長、羽島陽光の取持ちにより、同じ御家人仲間の次女と婚約が調った。それと同時に開明塾の教諭に取り立てられて、門弟の指導に当たる。そうなれば惣兵衛の隠居と、惣一郎の家督相続の話もそれほど遠くない。

次男慶次郎の身の振り方も、当然のごとく浮かび上がる。終生部屋住みの身に甘んじるわけには行かない。慶次郎は十七歳となり、先々の道を拓かなければならない。同時に隣家の伊織にも遠からず家督相続が生じ、妹の澄江の婚姻の話も生じてくる。

澄江は今年十三歳になる。当人は当然のごとく、隣家の慶次郎の許に嫁ぐつもりでいた。

それは三年前に、こんな一幕があったからだ。

惣兵衛と嘉平はいつものように木村の家で酒を汲んでいた。膳に並んだ鯉料理をつつきながら、漁の自慢話に花が咲いていた。そのうちに自分たちの隠居と家督相続のことに話が及んだ。二人はかなり酔っていた。そのとき何を思ったか、惣兵衛はふと思いついたひと言を口にした。

「のお、嘉平殿、せがれ惣一郎に澄江どのを貰えぬか？」

嘉平は即座にそれに応じた。

「それは良い！　まことに結構！　これで先々の心配が一つ消えた！」

二人が笑い声を上げたそのとき、当の澄江が徳利を抱えて部屋に入ってきた。良いときに来たと云わんばかりに、惣兵衛が澄江に向かって問い掛けた。

「澄江どの、ちと伺うが、澄江どのは我家の惣一郎の嫁になってもらえぬか？　どうじゃな？　無論いま直ぐと云うわけではない。もう四、五年も先のことじゃが？」

すると十歳になる澄江は背筋を伸ばし、両手を膝に揃え

て緊張した面持ちで答えを返した。
「惣一郎様は嫌でございます。慶次郎様ならよろしゅうございます」
その余りにもはっきりした物言いに、二人の老人は意表を突かれて互いの顔を見交わした。
「……そうか、慶次郎がよいか……、ならば慶次郎の嫁になってくれるか？」
少し頬を赤らめた澄江は、「はい」と大きな声で答え、駆けるようにして部屋を出ていった。二人は顔を見合わせて、再び大きな声を上げて笑った。
それは酒席での半ば戯れであったのだが、この話は両家に広まり、すでに婚約が調ったように受け取られた。この話を伊織から聞かされた慶次郎は、思わず頭に血が昇るのを感じた。それからは急に澄江が大人びて見え、今までのように悪戯をすることができなくなった。

慶次郎も伊織も同じ開明塾に通っている。塾は堅川と横川が交わる入江町にあり、学問と剣術を一つの屋敷内で教授していた。場所柄、塾生の大半は近隣の御家人の子弟であり、文武両道を掲げて多くの塾生を集めていた。
ある夏の日のことであった。隣席の林金四郎が見かけない本を開いていた。自慢するように、この文字が解るかと慶次郎に提示した。目にしたこともない文字が並んでいる。覗き込むように見詰めていると、これはオランダの文字だと云って、その中の一カ所、「KOP」を指で差し示した。
「これはコップと云って、湯飲みのことだ」
さてはこれが噂に聞くオランダ文字かと、手にして二、三枚捲ってはみたが、同じような文字が並んでいるだけである。オランダ文字が横書きされ、その横には和語が縦書きで記載されていた。
この偶然が、数年来胸の奥に蟠り（わだかま）続けていた何かを弾けさせた。一夜借用できないかと意気込んで頼み込んだが、きっぱりと断られた。
「この本は『ドゥーフ・ハルマ』と云うオランダ語の辞書なのだ。叔父が書き写した写本だが、買えば高価なものなのだ。もしも失うことがあれば、俺は腹を斬らねばならぬ」
と、大仰に勿体ぶって慶次郎から写本を取り上げると、素早く手元の風呂敷に包み始めた。
「どこへ行けば、その本を見ることができようか？」
慶次郎の真剣な物云いに金四郎はその手を止め、本心から云っているのかと探るような目付をした。どうやら本気らしいと分かり、
「叔父が蘭方医をしている。まだ駆け出しで、患者が少

ないから貧乏だ。紹介をするだけなら、その労を取ろう」と大人びた返答を返した。慶次郎は即座に頼み込んでいた。

数日後、塾からの帰り道、金四郎に伴われて江戸橋の南、本材木町へ向かっていた。夏の強烈な陽射しに、玉の汗が額から滴り落ちる。両国の広小路まで来ると、金四郎は口利きの代償を求めようとするのか、白玉を奢れと云った。懐には五十文ほどの銭しかない。茶代を加えると果たして足りるのかと、甚だ心配をした。辛うじて足りはしたものの、再び云い出しはしまいかと、材木町に到着するまでずっと気を揉んでいた。

江戸橋を渡り掘割に沿って一丁ばかり南に下った河岸に、蘭方医春斎の仕舞屋はあった。蘭方医春斎と書かれた一尺ほどの表札は新しく、格子戸の横に掲げられていた。

金四郎が先に入り、慶次郎は炎天下で陽に焼かれていた。程なく格子戸の内から金四郎の呼ぶ声があり、慶次郎は遠慮勝ちに中へ入った。すると奥から、

「構わぬから上がれ！」

と声が飛んできた。

春斎と名乗る蘭方医は思いのほか若い。いまだ三十歳に届かぬ若い医師は、浅黒く四角い顔の持ち主で、大きな眼と大きな口を持っていた。初対面にもかかわらず挨拶を抜きにして、気さくに話しかけてきた。

「お主は蘭方医になりたいのか？」

そのときの慶次郎に、それほどの決意があったわけではない。が、思わず「はい」と答えていた。

「たとえオランダ語の解読ができても医術の道は遠い。容易に高嶺に達することはできぬ。五年やそこらで一人前にはなれんぞ。それでもやるか？」

「先々のことは分かりませぬが、命懸けでやります！」

自分でも思ってもみなかった言葉が飛び出していた。

「よろしい、『ドゥーフ・ハルマ』は、わしが書き写したものだ。持ち出しはならぬが、何時でもこの部屋で見るがいい。お主がわしの最初の弟子だ。しかし金四郎にもこれほどの熱意があればのう……」

と、傍らの甥を顧みて苦笑した。当人は面子を潰されて不貞腐れている。

「わしも大坂から戻って二年にしかならぬ。わしも駆け出しなのだ。それゆえ、医師の看板を掲げてはいるが患者は少ない。したがって金がない。礼金を出せとは云わぬが、米や酒の都合がつけば真に有難い」

そう云って高らかに笑っていた。

帰り道では面目を潰された金四郎の愚痴を聞かされることになった。

「大坂に行く前は評判のおとなしい叔父であったのだ。五年を経て江戸に戻ってくると人柄が一変していた。親類縁者の間では、気が触れたのではないかと大騒ぎになった。そのために許嫁にも逃げられた。風変りな親戚を持つと、周りの者は気苦労が絶えないのだ」

大人びた物云いで叔父を見下し、己で己の溜飲を下げようとした。だが一風変わってはいても、慶次郎はその生気に満ちた人柄に好感を抱いたのである。

いつもより遅れて帰宅した慶次郎はその足で父親の許に向かい、意気込むようにして事情を打ち明けていた。惣兵衛は素直に喜び、その場で快諾し許しを与えた。慶次郎の独り立ちも近いと、それを思ってのことであろう。慶次郎、十七歳の夏のことであった。それからは折につけ、米や隣家から届けられた魚が江戸橋を越えて材木町に届けられた。

慶次郎は足繁く材木町へ通い、今は春斎の指示により『ドゥーフ・ハルマ』の筆写に精を出していた。ＡＢＣの基本文字を教えられ、五万語に及ぶ三千頁の『ドゥーフ・ハルマ』に挑戦していた。一語を書き写しては声を出して読み、和語を書き記す。

この一冊があれば、どこへ行ってもオランダ語の修得に不便はないと春斎は語り、いざとなれば売って金に換えればよいとも云った。幾らで売れるのかは分からなかったが、一分や二分ではないらしい。とにかく単語の暗記を兼ね、持ち慣れぬペンに墨を付けては、礬砂（どうさ）を引いた半紙に書き写していた。ペンとは云え、出来合いのものがあるわけでなく、鳥の羽の根元を削り割ってペン先に仕立てたものであった。春斎は使い慣れているらしく、美しく整った横文字を多少自慢げに書いて見せた。

膨大な『ハルマ』は、一日に三頁を写し得ても千日を要する。慣れるに従い一日の量を十頁以上と定め、来年の終わりまでには写し終えると心に決めていた。

脇目も振らず、ひたすら筆写に取り組む姿に、春斎は昔の自分の姿を見ていた。口にはしなかったが、ある思いを抱いて一通の書状を認めていた。春斎の師であり、適塾を主宰する緒方洪庵に宛てたものであった。

春斎の許を初めて訪れてから一年が過ぎようとしていた。夏も終わりに近くなったが、塾と蘭語の掛け持ちが当分は続くと考えていた。だが本格的な秋の声を聴く頃になると、慶次郎の周囲は俄かに騒がしくなり始めた。兄の惣一郎は学問で認められ、来春には開明塾の師範になることが決まっている。同時に妻を娶り、新妻を山田の家に迎えるこ

とになった。慶次郎が初めてこの話を耳にしたとき、正直なところ甚だ困惑した。せめてあと一年待ってくれと云いたかった。半年先に兄嫁がやってくるとなれば、慶次郎は部屋住みの身となる。落ち着かぬ思いが先に立ち、決断を急かされることになった。

だがそれも十日ばかりのことで、慶次郎の決断は早かった。数日後、師とする春斎に思いを打ち明けていた。

「そうか大坂へ行くか……、良いだろう。わしが洪庵先生に添状を書く」

実際のところ、春斎は半年前に書状を洪庵に送っていた。すでに入塾の許諾は得ている。

「学を成すは、今このときしかないと思うことだ。成し遂げて江戸へ戻り、わしを助けてくれ。その頃には、わしも多少は名を知られているかも知れぬ。大坂に向かう前に『ドゥーフ・ハルマ』を写し終わることだ。しかし、米や魚が届かぬとなると、わしも精を出して稼がねばなるまい」

いつものように、屈託なく笑って見せた。春斎も学んだ適塾の話は、断片的にだが聞かされている。江戸にも名の知れた蘭学塾は存在したが、適塾は天下随一の蘭学塾だと大声で太鼓判を押した。だが本当の適塾の凄さは、口では伝えられないことも承知していた。自ら全身全霊をもって知る外はないと、敢えてその詳細は語らなかったのである。

その夜、惣兵衛・慶次郎の親子は膝を交えて静かに話し込んでいた。

「そうか……、よく決意したな。行くがよい。わしもまだまだ死にはせぬ。金の心配はせぬことだ。こう見えても、そこそこの貯えはある。わしには手の技があるゆえ、二、三両の金はいつでも都合がつく。二人の息子が独り立ちし、わしも心置きなく隠居ができると云うものだ。楽しみが増えたと云うことだ」

惣兵衛は逞しくなった慶次郎を見詰め、封印していた何かが解けるように目尻を潤ませていた。

それに加え、慶次郎は澄江のことはどうするのかと訊きたくもあった。いまだに許嫁のことは事実であったのかどうか、はっきりしない。だが自分から云い出す勇気はなかった。澄江の兄の伊織も年が明ければ、塾長の推挙があって神田の千葉道場に移ると聞いている。両家の子弟はそれぞれの道を歩き始めていた。

あとふた月もすれば新しい年を迎える。翌年の三月までには、惣一郎、慶次郎、伊織の三人は大きく羽ばたいて、その姿を変える。両家にとって、一つの大きな転機を目の前にしていた。ただ澄江一人だけは置いて行かれそうで、そ

の小さな心を痛めて母親の袖を引き寄せていた。
「お母さま、慶次郎様は大坂へ行ってしまわれるのですか？」
母親から見ればまだまだ幼さが残る十三歳。気丈に見えて心根の優しい我が子。お信は労わるように澄江の手を取って優しく摩った。
「慶次郎様は、いずれ独り立ちしなければならないのです。でなければ妻を迎えることもできないのですよ。そのために大坂に行かれる決意をなされたのです。戻られたときには、きっと見違えるようになっておられましょう。そのとき、お前さまを嫁に欲しいと云われればよいのですが……」
お信はにこやかに笑いながら澄江の顔を覗き込んだ。それでも澄江には不満があるのか、口を結んだまま母親を睨み返した。澄江はこう云いたかったのだ。『慶次郎様の妻になることは、ずっと昔から決まっているではありませんか』と。
「それまでに、貴女も立派な大人にならなければなりませんね。わたくしも慶次郎様が行ってしまわれると、とても淋しいんですよ」
お信にしても澄江にしても、偽らざる思いであったのだ。
慶次郎にとって、それからの日々は矢のように過ぎて行く。燃え立つ思いと江戸に残す思いが錯綜して、今までになく気持ちが揺れている。見知らぬ世界に初めて旅立つ緊張と興奮が、日に日に胸を締めつけてくる。慌ただしく虚ろな正月を過ごし、節分を迎えようとしていた。
二月の十日には惣一郎の婚礼が執り行われ、その二日後には大坂へ向かって旅立つ。寒が冴え渡る夕べ、慶次郎は父惣兵衛に呼ばれた。改まった様子もなく日頃の調子で、
「そろそろじゃな。日が迫っては落ち着いて話せぬ。なに大したことではない」
そう云って手元の巾着を取り上げて慶次郎に差し出した。
「路銀と当座の入用だ。細かく一朱銀にしてある。心置きなく勉学に励んでもらえれば、わしに云うことは何もない。戻る日を楽しみにしている。それに……、万が一と云うこともある。もしわしが倒れることがあっても、帰るには及ばぬ。この御仏をお前の代わりに傍に置いて、毎日祈っている」
惣兵衛は背後を振り返り、床の間に置かれている六寸ほどの毘沙門像を指差した。赤味を帯びた一位の木の毘沙門天は、きめが細かく美しい。眉間に皺を寄せ、憤怒を湛えた目元は厳しさを見せている。口元は一文字に結ばれ、内に秘めた感情の高ぶりをぎりぎりのところで押し留めてい

た。穏やかな父親の、別の一面を覗き見たように感じた。
じっと仏像を見詰めていると、惣兵衛がその心の内を吐露したことが一度だけあったことを思いだす。それはまだ元服前で、慶次郎が十歳を超えた頃であった。朝から雪が降り続く中を、駆けるようにして開明塾から帰ってきた。家の中に人影がなかった。奥へ奥へと行き、炬燵が置いてある居間の襖を開くと、いつもは作業部屋にいるはずの父親の姿がそこにあった。
見つかったかと云わんばかりに、ちょっと照れたように笑った。
「寒かったであろう、早く炬燵へ入れ。こう底冷えしては適わんな」
云い訳とも取れる言葉で慶次郎を招き入れた。薄暗い部屋の中は行灯が灯され、惣兵衛は一尺ほどの一位の木を手にしていた。外側の白い部分は削り落とされ、芯の赤い部分だけになっている。その一位の材を、惣兵衛は矯めつ眇めつ丹念に見入っている。
何をしているのかと、慶次郎はその手元を注視していた。いつまでも止めない父親に向かって、慶次郎は問いかけた。
「何をなさっているのですか？」
にっこり笑って慶次郎を見下ろした父親は、少し考えるように目を瞑った。
「お前は外の降り積る雪の声が聞こえるか？」
そう云って慶次郎の返答を待った。
「何も聞こえませぬ。何の音もいたしませぬ」
「さうか……。わしはこの一位の中に仏の声を聞こうとしている。その声が聞こえてくるまで、こうしていつまでも待っておる。声が聞こえたその時にこそ、この一位の中に御仏の姿が浮かび上がる。解るかの？
同じことなのだ。雪と云うものは様々な声を包み込んで、おのれは声を上げぬ。わしはその声を聞こうとしている。無名の者たちの声なき声が聞こえてくるのだ」
慶次郎には理解できなかった。ただそのときの父親の凛とした面持ちが、いつまでも心に残って消えなかった。父親の厳しい表情に接したことは、それ以来一度もなかったのである。

惣兵衛は目立つことを嫌い、常に穏やかで優しい。一度たりとも家族や隣人に対し、声を荒らげたり手を上げたこともない。山田家の婿養子となる前は、大身の旗本の家士であった。仲間からのし上がり、家士に取り立てられたと聞いている。荒々しい仲間を取り仕切っていた父の姿など、どこを探しても想像できない。養子とは云っても、実際は金で御家人株を買っていた。